

<日韓合同セッション報告>

韓国原子力学会で日韓合同セッション開催される

大阪大学 山本 敏久

2002年5月23日～24日の2日間、韓国光州市の朝鮮大學校において韓国原子力学会の「春季共同学術発表会」が開催された。この2日目の午後一杯を使用し、炉物理部会と核データ部会の共催プログラムとして、通算3回目となる日韓合同セッションが行われ、両国における最新研究活動の報告がなされた。座長には、韓国側が KAIST の Nam Zin Cho 教授、日本側は武蔵工大の吉田正教授が務められた。この概要については後に紹介する。

今回の大会は、初の試みとして（社）韓国原子力学会と大韓放射線防護学会の共催で行われた。初日は、両学会の会長の挨拶、功労賞の表彰式の後に、日韓合同セッションの紹介があり、日本側からの参加者を起立させてひとりずつ紹介するという丁寧な歓迎ぶりであった。日本側を代表し、竹田敏一部会長）が住田健二原子力学会長からのメッセージの代読を務められた。

基調講演は、世界の原子力業界の最新動向に関するものであり、日本においては、原子力研究所と核燃料サイクル開発機構の合併が検討されていることが紹介された。

2日目の日韓共同セッションでは、日本側が6件、韓国側が5件の発表を行った。韓国側の発表内容は、核データ関連が2件（FP核種消滅処理用の中性子反応断面積の測定、鉄の二重微分断面積測定）、炉物理関連が3件（ペブルベッド用原子炉 RZ 体系用のノード法の開発、炉外中性子モニターのノイズ影響の低減化、随伴中性子束を用いたモンテカルロ分散低減法の研究）に関する内容であった。会場は定員40名程度の部屋であったが、入れ替わり立ち代り参加者が詰めかけ、常時8割を超える盛況ぶりであった。

全発表が終了したのは、予定時刻を大幅に過ぎてからであったが、日韓協力の新しい方法として、インターネットを利用した協力案（メイリングリスト作成、共用掲示板の設置、「紳士録」による個人情報公開など）が日本側から紹介された。今後、韓国側の意見を集約して前向きに進めることで合意した。次に、PHYSOR2002の前後に若干名を対象に炉物理セミナーを開催する案が竹田部会長から提案された。開催地は日本国内（大阪）、開催はPHYSOR2002の後にする、などの点で合意された。最後に、韓国側から今後の日韓合同セッションには、企業からの積極的な参加を望みたいという意見が出された。

[余録～光州そぞろ歩き]

初夏の光州はさわやかな気候に恵まれ、大学のキャンパスや、家々の庭に真

っ赤なバラが咲き誇っていたのが印象的であった。街の中心部は、映画館やファッション関係のアウトレット・ショップが軒を並べ、夜の8時ともなると、心齋橋界隈かと思まごうばかりの賑わいであった。1週間後のワールドカップ開催を控えて、光州は国際都市として着実に歩みを進めているとの印象を持った。

さて、喧騒に包まれた中心部を背に5分も歩けば、30年ほどタイムスリップしたような、どこか懐かしい町並みが続いているのであった。石壁の間を長々と続く道は、川のようにゆったりと曲がりくねっていて、角を曲がる度に、貰い物の包み紙を開けるようなワクワクした気分になる。人々は道端にイスを並べてのんびりと会話を楽しみ、洗濯機のけだるい唸りがそれに相槌を打っている。すでに失われた「自分の街」の心象風景を、30年後に異国の街で見出すのは、実に不思議な体験である。このような風景の中で、キムチを噛みしめたら、どんな味がするだろうか。

近年は、グローバル化が叫ばれて、民族固有の文化は姿を消す一方になっているが、洗練された（しかし、似通った）近代建物に住み、衛星中継で送られる同じテレビ画像を楽しむだけは、うわべのグローバリズムにしかならないと思う。これでは、スーパーで買ったパック入りキムチを食べると変わらない。キムチは、光州の町並みに見るような風景の中でこそ、真味を現すのではないか。お互いに相手の懐の奥深くまで歩を進め、明らかに異質としか考えられない二つの文化の中に、それでも消し去ることができない共通点（共感点というべきか）を見出した時、初めてグローバリズムは本物になるのだと思う。

今回、思わず郊外にホテルを予約したことで、ふたつの対照的なグローバリズムの姿を垣間見ることができた。今度、韓国の人を案内する時には、名所巡りだけではなくて、意外と「地味な」ところもいいんじゃないかと考えているところである。もっとも、相手もまた私のような変人だったらの話だが。

（本稿は、学会誌に報告した内容を一部修正し、後半に「余録」を追加したものです）